

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.295

2017年12月

第13回名古屋大学ホームカミングデイを開催



目次

●ニュース

第13回名古屋大学ホームカミングデイを開催	3
公益財団法人東海ジェンダー研究所への感謝状贈呈式を挙	7
第1回あいち自動運転推進コンソーシアム総会を開催	7
博士課程教育リーディングフォーラム2017を開催	8
地震防災訓練を実施	8
第1回「野依博士と夜まで生サロン」を開催	9
名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ開館記念式典を挙	9
平成29年度名古屋大学公開講座を開講	10
第58回経営協議会を開催	10
名古屋大学入試個別相談会を開催	11
平成29年度日本数学コンクール表彰式を挙	11
第6回石田賞授賞式を挙	12
平成29年秋の叙勲・褒章受章者が決まる	12

●知の未来へ

オノマトベが教えてくれる言語の本質	13
秋田 喜美（大学院人文学研究科准教授）	

●知の先端

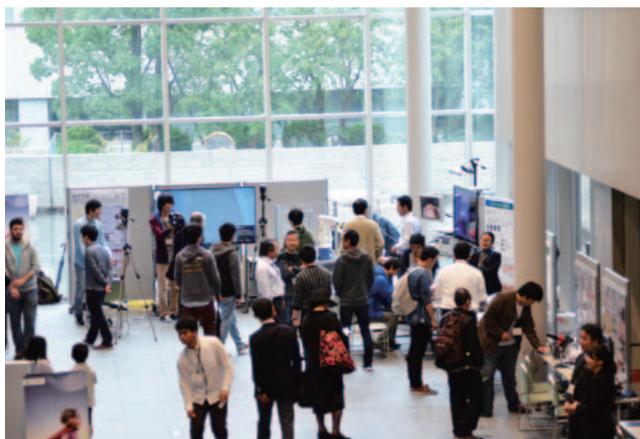
高圧の二酸化炭素と水を溶媒とした工学	14
後藤 元信（大学院工学研究科教授）	

●部局ニュース

ベトナム日本法教育研究センター設立10周年記念行事を開催	16
尾張旭市及び株式会社デンソーと連携協力協定を締結	16
テクノ・フェア名大2017を開催	17
陸別観測施設設立20周年記念シンポジウムを開催	17
2017年秋季特別展「旗本高木家の明治維新」(高木家文書展)を開催	18
平成29年度放射性同位元素等取扱施設安全管理担当教職員研修を開催	18
ICCAE 第2回オープンセミナーを開催	19
第35回企画展「ムシの世界」を開催	19
2017年度入館者2万人を達成	20
第55回地球教室「博物館の収蔵庫と野外で深海の地層と化石を調べよう！」を 開催	20
あいち・なごや強靱化共創センター設立記念 防災人材交流シンポジウム 「つなぎ舎」を開催	21
カンボジア王立8大学長との懇談を実施	21
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成29年10月16日～11月15日	22
●イベントカレンダー	26
●ちょっと名大史	
新制大学への道 ― 2019年のもう1つの周年 ―	28

第13回名古屋大学ホームカミングデイを開催





第13回名古屋大学ホームカミングデイが、10月21日(土)、東山キャンパス及び大幸キャンパスにおいて開催されました。当日は、台風21号の影響による雨天にも関わらず、同窓生や在学生の家族、近隣住民の方々を中心に約4,000名が来場しました。

ホームカミングデイには、「故郷に帰る」という意味が込められており、同窓生が母校に集うだけでなく、在学生の家族や教職員OB、地域の方々も「大家族」の一員として、本学との絆を深めてもらうための交流の場として、平成17年から、毎年10月の第3土曜日に開催しています。

今年は、大学院情報学研究科を中心部局とし、メインテーマは「尖った情報技術、やわらかな人間社会」としました。

当日は、主に職員が、来場者への対応、駐車整理などの業務にあたり、各部局においても、職員と学生が行事運営し、同窓生や在学生の保護者、地域住民の方々を迎えました。

また、サッカー部に所属する学生やあかりんご隊の学生も、「親子サッカー教室」や「あかりんご隊科学実験」の運営をサポートしました。

当日は、来場者記念品として、ホームカミングデイリーフレット等の入った特製のお土産バッグと、「ミネラルウォーター・名大ラベル引換券」を配付しました。



■学術講演会「人工知能を大局的にとらえ、未来を考える」

午前中、豊田講堂シンポジオンホールにおいて、数学の理論で脳の仕組みを解き明かそうとしている甘利俊一理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問と、ヒューマンインターフェースに関わる研究を進めている土井美和子情報通信研究機構監事が、「人工知能を大局的にとらえ、未来を考える」と題して学術講演を行いました。約155名の来場者で、会場はほぼ満席となりました。司会は、平成14年に情報文化学部を卒業し、元NHK長野放送局アナウンサーで、現在はフリーアナウンサーの若月弘一郎氏が務めました。第1部は講演会、第2部は討論会形式とし、討論会では、郷理事と戸田山和久情報学研究科教授が加わり、人工知能の未来などについて討論しました。

本講演会では、昨年4月に施行された「障害者差別解消法」を受け、昨年同様、聴覚障害をお持ちの方のために要約筆記を実施しました。第1部、第2部共に、記者が講師の話の要約し、文字をスクリーンに投影する形式を取りました。

また、関連企画として、豊田講堂ホワイエでは、「『情報』を体験しよう!」と題して、情報学部・大学院情報学研究科が推進する研究の中から、「情報」の現在を楽しく体験できるテーマで多数の展示を行い、多くの方に楽しんでいただきました。

■名古屋大学の集い

午後から、豊田講堂ホールにおいて、卒業後10周年、20周年、30周年、40周年、50周年を迎えた周年同窓生の方や、抽選で当選された一般の方を迎え、「名古屋大学の集

- | | | |
|---|---|---|
| 2 | 3 | 1 |
| 1 | 4 | 2 |
- 1 ホームカミングデイの開催を伝える大看板
 - 2 学術講演会における要約筆記の様子
 - 3 豊田講堂ホワイエの様子
 - 4 国際交流貢献顕彰授与式



い」を開催しました。午前中に豊田講堂シンポジオンホールで行われた学術講演会で司会を務めた若月アナウンサーが、引き続き司会進行を務めました。はじめに、松尾総長、豊田章一郎全学同窓会会長からあいさつがあり、次いで、和田壽弘全学同窓会代表幹事から、全学同窓会の活動報告が行われました。続く「名古屋大学国際交流貢献顕彰授与式」では、リジャン・バクタ・カヤスタ カトマンズ大学准教授、フィリピン大学ロスバニョス校学長補佐であるクリスティーノ・ミランダ・コリアード全学同窓会フィリピン支部前支部長、ウズベキスタン中央銀行部長であるバホディール・メルガノフ全学同窓会ウズベキスタン支部長の3名に対し、国際的な取り組みに対する功績を称え、表彰状と記念品が授与されました。

休憩を挟み、引き続き、名古屋フィルハーモニー交響楽団によるコンサートが行われました。指揮者にはラルフ・ワイケルト氏、ソリストにはフルーティストの上野星矢氏を迎えました。ワイケルト氏は、ボン歌劇場音楽監督、フランクフルト歌劇場音楽総監督、チューリヒ歌劇場音楽監督などを務め、主要オペラハウスとオーケストラに客演を重ねるなど、世界を舞台に活躍されている指揮者です。また、上野氏は、「第8回ジャン＝ピエール・ランパル国際フルートコンクール」で優勝し、ヨーロッパと日本を主な拠点として活躍されています。今回は、アンコールを含め、全4曲が披露されました。



また、午前中は、昨年初めて実施して好評を博した名古屋フィルハーモニー交響楽団による公開リハーサルを実施しました。普段見ることのできない練習風景に、会場の来場者は興奮した面持ちでした。

■スタンプラリー

今回も、前回初めて実施して好評を得た、主要施設6カ所（赤崎記念研究館、減災館、ES総合館（2008ノーベル賞展示室）、野依記念物質科学研究館（ケミストリーギャラリー）、中央図書館、博物館・古川記念館）を巡るスタンプラリーを実施しました。6カ所のスタンプ押印を完了された方のうち、抽選で300名に「名大オリジナルマグカップ」を進呈するこのイベントには、多数の来場者が参加しました。また、参加者からは「スタンプラリーのお陰で大学の施設を見学することができたので、改めてゆっくり訪問したい」などの声がありました。

■施設公開「ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）」

ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）では、11月の開館に先駆けて、ホームカミングデー当日に内覧会を実施し、110名を超える来場者がありました。1階に併設されている、CAFE BLANC（カフェブラン）もプレオープンしました。





■各種相談会

ナショナルイノベーションコンプレックス (NIC) 3階多世代共用スペースでは、学生相談総合センター、男女共同参画室、未来社会創造機構まちづくりプロジェクト、ビジネス人材育成センター(B-jin)の主催で、卒業生向けキャリア支援企画「名大パパ+ママサロン」が開催されました。子育てしやすいコミュニティづくりを目指して、同窓生同士や学生、教職員との出会いの場を設けるこの座談会企画では、「職場の上司や同僚、地域との接し方のヒント」をテーマに、参加者らがテーブルを囲んで、気楽に語り合いました。

ES 総合館034、035講義室で行われた「シュウサポ OBOG 交流会～これからのキャリアについて考えよう～」では、就活サポーター OBOG を中心とした若手社会人卒業生と在学生在が、座談会を通して「キャリアを通じて自ら成し遂げたいこと」等を発見・確認していく企画が行われました。

■体験企画「あかりんご隊科学実験『光のひみつ』」、「名古屋グランパススクールコーチによる親子ふれあいサッカー教室」

「あかりんご隊科学実験」及び「名古屋グランパススクールコーチによる親子ふれあいサッカー教室」は、毎年人気の小学生向けの企画です。「あかりんご隊科学実験」には、



今年も募集人数を超える申込みがありました。

本学の理系女子学生で構成される「あかりんご隊」が、子どもたちに実験の楽しさを伝える企画を考え、今年のテーマを「光のひみつ」としました。野依記念学術交流館1階カフェスペースにおいて、あかりんご隊が実験方法を説明し、保護者の方に見守られながら、子どもたち自身の手でこまを作って、色の不思議を体験する実験にチャレンジしました。

陸上競技場で実施予定だった「親子ふれあいサッカー教室」は、雨天のため、新体育館で実施しました。名古屋グランパススクールコーチの指導の下、サッカーの基本プレイを学び、ミニゲーム等を行いました。子どもたちだけでなく、保護者の方の笑い声もたくさん響き、怪我もなく、親子のふれあいを楽しむ様子が見られ、大好評でした。

■見学ツアー「超高圧電子顕微鏡施設」

未来材料・システム研究所による超高圧電子顕微鏡施設見学ツアーも、毎年人気の企画であり、今年は昨年を超える約400名の申込みがありました。参加者は、地面からの高さ10mにもなる「反応科学超高圧走査透過電子顕微鏡 JEM-1000K RS」を間近に見ることができ、熱心に説明を聞いていました。

1	2	5	6
3	4	7	

- 1 名古屋フィルハーモニー交響楽団による公開リハーサル
- 2 スタンプラリーの様子
- 3 名古屋フィルハーモニー交響楽団によるコンサート
- 4 ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL) の建物
- 5 名大パパ+ママサロン
- 6 あかりんご隊科学実験「光のひみつ」
- 7 名古屋グランパススクールコーチによる親子ふれあいサッカー教室



■中央図書館、博物館、大学文書資料室企画

中央図書館では、オープンライブラリーのほか、「旗本高木家の明治維新」と題した秋季特別展を開催し、「高木家文書」の中から明治維新期の資料を紹介しました。

毎年販売開始前から行列ができるほどの盛況ぶりである本のリユース市は、昨年の豊田講堂南側ピロティから図書館へ場所を移して行われました。学術書等手に入りにくい図書が安価に入手できることもあり、今年も多くの方が本を購入しました。

博物館では、企画展「ムシの世界」を開催しました。関連行事として、企画展に約100点を出品している3D切り紙作家の石川進一朗氏による、虫の3D切り紙実演が行われ、精巧な制作過程を披露しました。

豊田講堂ホワイエでは、大学文書資料室の展示企画として、「名大史資料展－こんな史料ありませんか－」を行いました。参加者は、本学の歴史に関わる様々な時代や種類の資料に興味深く見学していました。

■販売コーナー

豊田講堂南側ピロティの販売コーナーでは、農産物の販売、大学生協による名大グッズ等の販売が行われました。

農産物の販売では、大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センターである東郷フィールド内の大地で育てられた柿やさつまいもなどの新鮮な果物や野菜、米が



販売され、人気を集めていました。

大学生協による名大グッズ等の販売では、名大饅頭や名大オリジナルマグカップなど商品が豊富に並び、名大ベジタブルカレーの試食や名大フェアトレードコーヒーの試飲も行われ、多くの人で賑わいを見せていました。

■各学部・研究科主催行事等

各学部・研究科においては、市民公開講座、同窓会関係行事、在学生の保護者向け行事等が企画されました。

多彩な分野の講演タイトルが出揃った市民公開講座は、現役の教員だけでなく、名誉教授や同窓生等を講師に迎え、同窓生も一般の方も楽しめるよう講演内容に工夫が凝らされていました。

また、保護者向け行事では、学部・研究科ごとに、教育・研究内容の紹介や進路・就職状況について説明があり、保護者からの質疑応答や個別相談も行われました。保護者向け行事の参加者には、日頃、学生が食べている大学生協の食事の提供も行いました。参加者からは、「子供からの情報が少ない中、同じ悩みを持つ親同士で情報共有ができ、また、教員と直接話をできる貴重な機会であった」などの声がありました。

雨天ではありましたが、参加された多数の方に、楽しい一日を過ごしていただき、ホームカミングデイを通じて、本学との繋がりをより一層深めてもらうことができました。来年も10月の第3土曜日（平成30年10月20日(土)）に開催致しますので、是非、お越しください。



- | | | |
|---|---|-----------------|
| 1 | 2 | 1 博物館企画展「ムシの世界」 |
| | | 2 販売コーナーの様子 |
| 3 | | 3 市民公開講座の様子 |

公益財団法人東海ジェンダー研究所への感謝状贈呈式を挙行

公益財団法人東海ジェンダー研究所への感謝状贈呈式を、10月18日(水)、西山恵美本研究所代表理事、日置雅子同業務執行理事、尾関博子同事務局長を招き、総長応接室において挙行了しました。

これは、本研究所からジェンダー・リサーチ・ライブラリへ、ジェンダー研究関連図書資料11,000点余りの寄贈に



感謝状贈呈式の様子

より、蔵書整備に多大な貢献がなされたこと、ならびに、高額な運営資金を寄附されたことへ感謝の意を表すためのものです。

贈呈式終了後は、本研究所の方々と、松尾総長、東村男女共同参画センター長、榊原千鶴男女共同参画センター教授、三枝麻由美男女共同参画センター准教授、森附属図書館長のほか、ジェンダー・リサーチ・ライブラリの準備に関わった木下総務部長、樋田職員課長、木下附属図書館事務部長、竹谷附属図書館情報管理課長ら本学関係者とが、ライブラリ創設にいたる思い出話や、開館に向けた期待などについて懇談、意見交換を行いました。

第1回あいち自動運転推進コンソーシアム総会を開催

第1回あいち自動運転推進コンソーシアム総会が、10月20日(金)、ナショナルイノベーションコンプレックス(NIC)において、愛知県との共催で開催されました。本コンソーシアムは、自動運転システムの早期展開に向け、推進する企業・大学と導入を目指す市町村とのマッチングを図り、愛知県内各所における自動運転の実証実験と自動



森川教授による講演の様子

運転に係るイノベーションによる新たな事業、ビジネスモデルを創出し、オールあいちによる自動運転の社会実装を目指すことを目的に設置されました。

本総会では、大村秀章愛知県知事、財満未来社会創造機構長が冒頭にあいさつし、コンソーシアムへの高い期待が述べられました。吉澤 隆愛知県産業労働部長による事業説明に続き、森川高行未来社会創造機構教授による「自動運転がもたらす社会と名古屋大学 COI の取組み」と題した講演が行われました。その後、自動運転を推進している企業や自治体からの講演があり、さらに自動運転実証実験に用いる車両(ゆっくり自動運転® 名大 COI ハードプラットフォーム第1号の超小型EV車や遠隔型自動運転車両など)の展示見学を行いました。当日は、自治体30機関、企業20機関、大学3機関、関係団体2機関の合計55機関の会員から92名の参加者がありました。

総会終了後の交流会では、自治体、企業、大学、関係団体の垣根を越え、自動運転等について活発な意見交換が行われ、今後の発展につながる会となりました。

博士課程教育リーディングフォーラム2017を開催

「博士課程教育リーディングフォーラム2017」が、10月20日(金)、21日(土)の両日、名古屋マリオットアソシアホテルにおいて開催され、全国から総勢約1,200名の参加を得ました。19日(木)に「プレフォーラム」を実施したため、参加者によっては計3日間の長丁場となりましたが、学生を中心に最終日まで熱い議論が続きました。



開会あいさつをする松尾総長

5回目となる本年度は、初年度採択プログラムが事業最終年度を迎える節目の年にあたることから、「リーディングプログラムのレガシーと修了生への期待」をテーマに、全国62プログラムでの幅広い取り組みを振り返り、学生が成果を発信するにとどまらず、「今後の大学院教育に受け継ぐべき財産(レガシー)とは何か」についても議論がなされました。

1日目は濱口道成科学技術振興機構理事長、吉田晴乃BTジャパン株式会社代表取締役社長によるエネルギーシユな基調講演を皮切りに、初年度採択プログラム所属学生による成果発表や産学官を交えたパネルディスカッションのほか、博士論文執筆に向けた研究やリーディングプログラムでの活動・成果についての学生ポスター発表と質疑も行われました。2日目にはテーマごとの分科会や修了生を交えた企画も実施され、盛会のうちに終わりました。

また、本フォーラムは企業関係者と博士課程在学生在が直接接点を持つことのできる貴重な機会であり、中部地方初の開催であったことから、東海エリアに拠点をもつ企業からの参加者も多く、博士人材の大きな変化、必要性や魅力、博士課程教育の未来について認識を新たにする好機となりました。

地震防災訓練を実施

名古屋大学地震防災訓練が、10月26日(木)に実施されました。本学では毎年、春と秋に全学防災訓練を実施しています。今回は授業時間中に南海トラフ巨大地震が発生したことを想定し、全学の構成員がそれぞれの役割に応じて対応を行い、1万名以上の参加がありました。

当日は、午前11時30分に緊急地震速報が全学に放送さ



災害対策本部の訓練の様子

れ、2分間の安全確保行動をとった後、各建物の避難場所に教職員の誘導で一斉避難しました。その他に各建物・ブロック・本部の自衛消防隊の活動、災害対策本部・災害対策部局本部の運用、安否確認も実施されました。

特に多くの学生が授業を受ける全学教育棟では、部屋ごとの避難経路を示した説明図を英文併記に改良し、避難場所までの動線を明示するなどの準備をして、安全に避難できることを確認しました。災害対策本部では災害直後の対応訓練を実施し、全学から無線で入ってくる報告を、重要度・緊急度により色分けした災害情報集約ボードにより的確に整理して状況把握するなど、本番さながらの緊張感ある訓練となりました。また、東海8国立大学の災害時の連携協定を踏まえ、災害時優先電話等により各大学と実際に通話し、情報共有の体制を互いに確認しました。負傷者や建物被害への対応、障がいのある方の避難、周辺住民の緊急避難を想定した対応にも取り組みました。

大規模な自然災害や非常事態への対応は重要度を増しています。大学の安全を確保し、教育と研究を継続できるよう、新たな課題に取り組みながら定期的に防災訓練を実施して有事に備えます。

第1回「野依博士と夜まで生サロン」を開催

「野依博士と夜まで生サロン」が、10月30日(月)、野依記念物質科学研究館において開催されました。

高等研究院では、今年から野依良治特別教授と学生及び若手研究者が一同に介して特定のテーマについて議論を行う、分野も世代も超越したサロンを始めました。これまで行ってきた「野依良治博士アカデミーサロン」をベースに



参加者と討論される野依特別教授

したのですが、より一層学生や若手研究者の敷居を下げ、フランクに話し合える場となることを目指しました。これまでとの違いは、議題となるテーマを野依特別教授ではなく、参加者から提案するという点です。実際にはファシリテーターと呼ばれる若手研究者がテーマを決め、当日も議論をリードします。

第1回は、アミロバ・ナルギザ高等研究院准教授がファシリテーターを務め、「Overcoming Fear of Failure」(失敗への恐れへの克服)をテーマに議論を行いました。日本人学生だけでなく、ロシアや東南アジアからの留学生の参加が目立ちました。サロンでは学生の多くが抱える将来への不安や、研究で失敗した時にどう対処すれば良いかなどの質問が飛び交いました。野依特別教授からは、参加者の予想しない答えが返ってくるなど、終始新たな発見と気付きに驚きと喜びで満たされた会になりました。サロンでの一流の研究者との対等な立場での議論は、学生や若い研究者にとってかけがえのない貴重な機会となりました。参加者らがまとめたレポートは高等研究院のホームページから閲覧できます。

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ開館記念式典を挙

本学と公益財団法人東海ジェンダー研究所共催による「名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL) 開館記念式典」が、10月31日(火)、GRLにおいて挙行されました。

式典には、来賓である武川恵子内閣府男女共同参画局長、常盤 豊文部科学省生涯学習政策局長、東京大学附

属図書館長でもある久留島典子国立大学図書館協会長、内海房子国立女性教育会館理事長をはじめ、学内外から約70名が出席しました。

式典のあいさつで松尾総長は、本施設が日本におけるジェンダー研究の新しい境地を切り開く拠点となるよう創設の意義を語り、来賓からは、全国の研究機関、図書館との緊密な連携をベースにした男女平等意識の啓発、推進や、研究者の育成への期待が寄せられました。

1階図書スペースには、東海ジェンダー研究所より寄贈された約2万冊の図書資料とアーカイブのうち、開館時には約1万2千冊が配架されており、ライブラリの核となる「水田珠枝文庫」は、研究者個人の足跡に留まらず、日本におけるフェミニズム史の軌跡をたどりうる場となっています。

内覧会参加者は、図書のラインナップを眺めつつ、思い思いに本を手にしたリ、「水田珠枝文庫から」と題された貴重書の展示や、エントランス正面に描かれた「フランス人権宣言」とオランプ・ドゥ・グージュによる「女性および女性市民のための権利宣言」などに見入っていました。



GRL 開館記念式典の様子

平成29年度名古屋大学公開講座を開講

平成29年度名古屋大学公開講座が、9月21日(木)から10月31日(火)までの間、ES総合館ESホールにおいて開講されました。本講座は、昭和44年度から開設され、今年度で49回目となります。

今年度は「格差の様相－多様性と成長」をテーマに全10回の講義が行われました。総合大学である利を生かし、



総長、財満理事と永年表彰者による記念撮影

様々な分野の本学教員10名が講師を務め、テーマに添って、個性ある講義を行いました。講義終了後には受講者から多数の質問が投げかけられるなど、多様な側面を持つこのテーマについての関心の高さがうかがえました。

10月31日(火)には閉講式が行われ、受講者132名のうち講義に7回以上出席した104名の方に修了証書が授与されました。また、財満理事のあいさつの後、平成19年度から導入された表彰制度に基づき、平成10年度以降に5年参加した11名の方に表彰状が、10年参加した2名の方と15年参加した2名の方に表彰状と記念品が授与されました。

今年度は表彰制度導入後、初めての20年表彰が行われました。20年目を迎えた受講者3名には、松尾総長のあいさつの後、表彰状授与が行われました。受講者からは、来年度の開講を今から楽しみにしているとの声も聞かれました。

また、公開講座開講に先立ち、7月30日(日)から10月1日(日)の毎週日曜日には、東海ラジオにて、ラジオ放送公開講座「名古屋大学リレーセミナー」として全10回の放送を行いました。

第58回経営協議会を開催

第58回経営協議会が、10月31日(火)、アジア法交流館2階アジアコミュニティフォーラムにおいて開催されました。

協議会では、松尾総長からのあいさつの後、指定国立大学法人制度、人事関係諸制度の改正、豊川団地に係る土地の一部譲渡及び平成29年度業務達成基準適用事業について総長及び各担当理事から説明が行われ、審議の結果、了承

されました。

次いで、平成30年度概算要求、名古屋大学財務レポート2017、平成29年度国際プログラム群入学試験の結果及び進路状況調査、第13回ホームカミングデイの実施報告、名古屋大学基金及び周年事業について報告が行われました。

また、経営協議会終了後、外部委員出席の下、当日開催したジェンダー・リサーチ・ライブラリを見学しました。



経営協議会の様子

名古屋大学入試個別相談会を開催

名古屋大学入試個別相談会が、11月4日(土)、豊田講堂シンポジオン会議室及びアトリウムで開催されました。これは、主に受験を目前に控えた高校生等やその保護者を対象として、単に入試制度に関する説明をするだけでなく、志望学部・学科での授業内容や研究指導方法など個別の疑問に当該所属の教職員が直接対応することで、受験者が抱



大学案内誌を読み順番を待つ参加者

く学習関心と実際の授業内容・研究指導等とのより良いマッチングを図ることを目的として、全学部の協力の下、本学主催の行事として初めて実施されたものです。

シンポジオン会議室での木俣副総長による開会あいさつに続き、アトリウムでは、各学部・学科のブースのほか在学生との対談用など3種26ブースが開設され、来場者からの個別相談を受けました。また、これと並行して、シンポジオン会議室では、学部による概要説明、教育基盤連携本部アドミッション部門と教育推進部入試課による入試・学生生活全般に関する講演が行われました。

今回の入試個別相談会には、これまでに志願者のあった、あるいは今後志願者が見込まれる関東・中部・近畿・九州の各地区の高校等から、総勢149名の参加者があり、計228件の相談が寄せられました。

オープンキャンパスとは違い、「大学案内誌やホームページの情報より詳細な研究内容」「求められている学生像」「入学後の教育体制」「希望する職種・職業への就職方法」など、さらに踏み込んだ質問が多く、本学への進学意欲をのぞかせる受験生と優秀な学生を迎えたい各学部・学科の教職員の真剣味がうかがえる相談会となりました。

平成29年度日本数学コンクール表彰式を挙行

平成29年度日本数学コンクール表彰式が、11月5日(日)、理学南館坂田・平田ホールにおいて挙行されました。今回は、受賞した生徒とその保護者等、約100名が出席しました。

表彰式では、日本数学コンクール委員会委員長を務めている高橋理事、尾崎和由愛知県教育委員会高等学校教育課



受賞者へあいさつをする高橋理事・日本数学コンクール委員会委員長

指導主事からあいさつがあった後、8月6日(日)に名古屋・大阪・三重・和歌山・福井の5会場で行われた第28回日本数学コンクール個人戦・団体戦、第21回日本ジュニア数学コンクール個人戦・団体戦で優秀な成績を収めた64名及び第18回日本数学コンクール論文賞で優秀な論文を作成した8組(12名)に対し、高橋理事から賞状、メダル及び副賞が授与されました。

続いて、日本数学コンクール個人戦及び団体戦の大賞、日本ジュニア数学コンクール個人戦及び団体戦の大賞、日本数学コンクール論文賞の金賞を受賞した生徒から、それぞれ受賞の喜びと感謝の言葉が述べられました。

日本数学コンクール実行委員会委員長である宇澤 達多元数理科学研究科教授から全体講評があった後、受賞者が集合して記念写真を撮影しました。

表彰式終了後には、問題作成に携わった実行委員の教員が、問題に対する解答とそこに辿り着く過程や考え方について、生徒と会話しながらポスターセッション形式で解説をしました。真剣な表情で解説を聞いた後に、改めて問題を解き直す生徒の姿が、会場のそこかしこで見られました。

第6回石田賞授賞式を挙

第6回石田賞授賞式が、11月13日(月)、本部事務局1号館第2会議室において挙行されました。石田賞は、石田財団からのご寄附の意志に基づき、将来の発展が期待できる優れた研究能力を有する若手研究者を顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援する目的で創設されました。今年度は第6回として、人文・社会科学、自然科学の両分



記念撮影（左から市川特任助教、総長、瀬川特任准教授）

野に分け、東海3県（愛知、岐阜、三重）内の研究機関で研究する若手研究者を対象として募集を行いました。慎重な審査の結果、人文・社会科学分野から市川 彰高等研究院（人文学研究科）特任助教、自然科学分野から瀬川泰知理学研究科特任准教授を顕彰することを決定しました。

授賞式には松尾総長、高橋理事、松下理事、木村理事及び審査委員が出席し、高橋理事から受賞者の発表及び研究テーマについての審査講評があった後、総長から「今後も研究に励んでいただきたい。石田賞の名がより輝くような活躍を期待する」とのあいさつがありました。

また、受賞者からは「名誉ある賞をいただけて大変光栄である」、「石田賞を受賞した過去の先輩方に負けないよう、今後も研究に取り組みたい」との謝辞がありました。

その後、総長応接室において、受賞者及び授賞式出席者との懇談が行われ、研究活動や今後の発展性についての意見交換が行われました。

平成29年秋の叙勲・褒章受章者が決まる

－本学関係者5名が慶びの受章－

平成29年秋の叙勲及び褒章の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

瑞宝章は、国家又は公共に対して功労のある方のうち、公務等に長年にわたり従事し、成績を挙げた方に授与され

ます。

紫綬褒章は、科学技術分野における発明・発見や、学術、芸術上の分野に関して事績の著しい方に授与されます。

【叙勲】

[男女共同参画社会形成推進功労・教育研究功労関係]

瑞宝中綬章

郷 通子 名誉教授（理学研究科）

[教育研究功労関係]

瑞宝中綬章

三田 一郎 名誉教授（理学研究科）

【褒章】

紫綬褒章

貝淵 弘三 医学系研究科教授

[保健衛生功労・教育研究功労関係]

瑞宝中綬章

杉浦 康夫 名誉教授（医学系研究科）

[保健衛生功労関係]

瑞宝双光章

松本 祐之 元医学部附属病院医療技術部
臨床検査技師長

オノマトペが教えてくれる言語の本質

秋田 喜美
大学院人文学研究科准教授

朝の東山キャンパスを歩いていると、雀がチュンチュンとさえずり、木の葉がヒラヒラと舞っていました。「チュンチュン」や「ヒラヒラ」のような擬音語・擬態語は「オノマトペ」(ideophone)と呼ばれます。オノマトペが多い言語は世界中に分布しており、スペインのバスク語でトコトコは「ティピタパ」、インドのムンダ語でプヨプヨは「ルグルルグル」といいます。オノマトペの言語学を研究しているという、「オノマトペって言語なの?!」と驚かれることがあります。ところが、実はオノマトペは言語の本質について考える際に重要なヒントをくれます。

オノマトペは、選び抜かれた音の組み合わせで物事を真似る言葉です。「ティピタパ」や「ルグルルグル」の音使いにも何とか共感できるとすれば、そのためでしょう。オノマトペによる「模倣」がしっくりくる理由は音使いだけではなくありません。オノマトペには特殊な発声法や身振りが伴いやすいという特徴もあります。例えば、図1の「ズーッと」というオノマトペは強ばった声で発音され、真っ直ぐに延びる道を描く身振りがついています。オノマトペは模倣的 (iconic) かつ多感覚的 (multimodal) なのです。

一方、これらの特徴は、オノマトペが文の中核である述語に取りこまれると弱まります。図2の「ゴチャゴチャしてる」というオノマトペ動詞は、発音上も目立たず、身振りの同期も見られません。オノマトペは静かに言語に入りこむのです。この話はなんと、「オノマトペから言語ができた」という古くて大胆な仮説の再評価を呼んでいます。子どもがオノマトペから言語の世界に入っていくように、オノマトペが抽象化することでヒトの言語ができたという仮説です。

西洋言語中心の言語研究において、オノマトペは例外的で研究価値のない存在でした。でも仮に、音声言語と同じく自然言語である手話からスタートしていたら、どうだったでしょう？ 手話は多かれ少なかれ模倣的です。また、その「発音」は手、体、顔を駆使するため多感覚的です。言語の模倣性や多感覚性が当たり前の世界だったら、オノマトペは言語の典型だったかもしれません。

オノマトペは、選び抜かれた音の組み合わせで物事を真似る言葉です。「ティピタパ」や「ルグルルグル」の音使いにも何とか共感できるとすれば、そのためでしょう。オノマトペによる「模倣」がしっくりくる理由は音使いだけではなくありません。オノマトペには特殊な発声法や身振りが伴いやすいという特徴もあります。例えば、図1の「ズーッと」というオノマトペは強ばった声で発音され、真っ直ぐに延びる道を描く身振りがつ

いて、オノマトペは模倣的 (iconic) かつ多感覚的 (multimodal) なのです。

一方、これらの特徴は、オノマトペが文の中核である述語に取りこまれると弱まります。図2の「ゴチャゴチャしてる」というオノマトペ動詞は、発音上も目立たず、身振りの同期も見られません。オノマトペは静かに言語に入りこむのです。この話はなんと、「オノマトペから言語ができた」という古くて大胆な仮説の再評価を呼んでいます。子どもがオノマトペから言語の世界に入っていくように、オノマトペが抽象化することでヒトの言語ができたという仮説です。

西洋言語中心の言語研究において、オノマトペは例外的で研究価値のない存在でした。でも仮に、音声言語と同じく自然言語である手話からスタートしていたら、どうだったでしょう？ 手話は多かれ少なかれ模倣的です。また、その「発音」は手、体、顔を駆使するため多感覚的です。言語の模倣性や多感覚性が当たり前の世界だったら、オノマトペは言語の典型だったかもしれません。

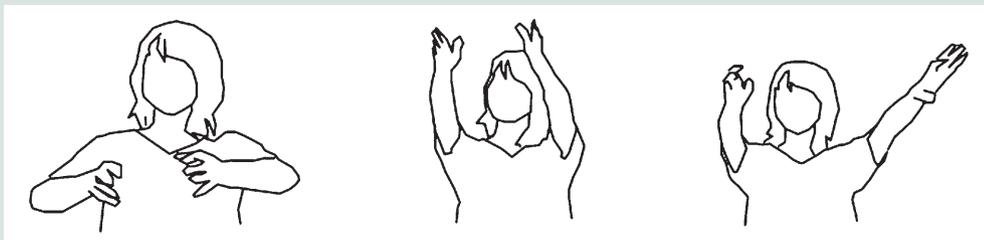


図1 自分の立っている所から真っ正面にズーッと直進したら、図書館と...



図2 じゃあやっぱりなんか (子どもの動詞の使い方は) ゴチャゴチャしてるのはゴチャゴチャしてそうなんだ

高圧の二酸化炭素と水を溶媒とした工学

後藤 元信 大学院工学研究科教授

二酸化炭素を7.37MPa、31℃以上の圧力と温度にすると図1に示すように「超臨界流体」と呼ばれる状態になります。圧縮しても凝縮せず、密度が高い気体のような状態で、有機化合物を溶解することができ、その溶解力は温度や圧力で大幅に変えることができます。そのため、有機溶媒に代わり分離溶媒、材料調製溶媒や反応場として用いることができ、環境低負荷のグリーンプロセスが可能となります。コーヒー豆の脱カフェインやビール製造のためのホップからのエキス抽出、香料や香辛料の抽出などに用いられてきています。一方、水の場合は22.1MPa、374℃以上で超臨界流体となります。温度が高いため、反応性も高く、反応場として廃水処理や無機ナノ粒子の合成などに使われています。水は加圧下において液体

の状態を温度を沸点以上に上げると誘電率が小さくなり有機溶媒のように有機化合物を溶解し、イオン積が高くなるため、水のみで強酸や強アルカリの性質を示します。したがって、沸点から臨界点の温度範囲の「亜臨界水」と呼ばれる水は分離溶媒や反応場として興味深い性質を有します。バイオマスの資源化やプラスチックのリサイクルの反応媒体としての利用などが活発に研究されています。

グリーン溶媒プラットフォーム

私たちは高圧の二酸化炭素と水の混合溶媒を利用したグリーン溶媒プラットフォームを提案しました。水を溶解した超臨界二酸化炭素を始め、二酸化炭素を溶解した亜臨界水などを複合させるプ

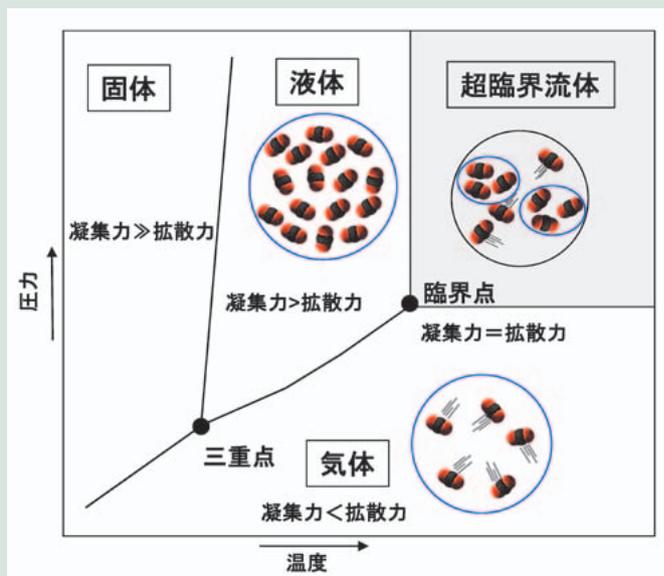


図1 純物質の状態図

プロセスであり、硫酸などの酸を用いずに加水分解などの反応が促進され、低分子から極性が高い高分子まで抽出を可能とするものです。さらに、液体の水と超臨界二酸化炭素を二相系溶媒として用い極性物質と無極性物質を同時に分離抽出する手法を開発しました。応用例としてコーヒー生豆からカフェインとポリフェノールを同時抽出し、焙煎後にポリフェノールを豆に戻すプロセスなどが考えられます。その他にも生理活性が注目されている植物や藻類に含まれるカロテノイド類や脂質の効率的な抽出方法や精製方法を研究しています。

ナノ材料調製

超臨界流体を利用した微粒子調製法にはいくつかあり、私たちは超臨界貧溶媒法を用いた天然物の微粒子化を検討してきました。有機溶媒に溶解させた目的物質を超臨界二酸化炭素と混合することで、溶解度の急激な減少により微粒子が得られるものです。本手法により各種カロテノイドや

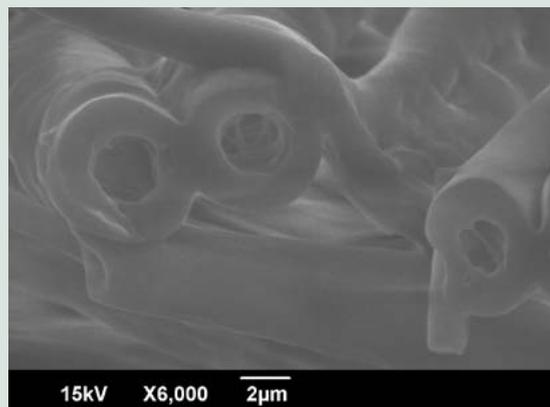


図2 エレクトロスピンニング法で得られた中空ファイバー

多糖類などの複合体のナノ粒子化を行いました。

高分子のナノファイバーやナノ粒子を作成する手法にエレクトロスピンニング法（静電紡糸法）があり、通常は大気中で行われるものを私たちは高圧の二酸化炭素の中で紡糸する手法を開発しました。高圧流体を利用することで図2に示すように中空のマイクロファイバーやナノ粒子を作成することができました。一方、細胞膜の脂質二重膜を模したナノ粒子であるリポソームを、有機溶媒の代わりに超臨界二酸化炭素を用いて、超音波照射により作成しました。有機溶媒の残存がないため、ドラッグデリバリーや化粧品などへの応用が期待されています。

高圧流体中でのプラズマによる反応

高圧流体中あるいは高圧流体・液体界面において放電あるいはレーザー照射によりプラズマを生成し、化学反応や材料調製に応用する手法を開発してきました。高圧力下ではプラズマによる化学反応が促進され、炭素や金属のナノ粒子やそれらのハイブリッド粒子が生成されることがわかりました。

社会実装による研究の社会への貢献

私たちが長年行ってきた研究を社会実装するために、名古屋大学発ベンチャーとして2013年に超臨界技術センター株式会社を桑名市に設立しました。主に超臨界二酸化炭素を用いた技術を使った天然物等の抽出や分離に関する研究開発、受託生産をしており、2017年には我が国で最初の脱カフェインコーヒー豆の製造を開始しました。その他の研究成果についても企業との共同研究を通して社会に還元していきたいと思っています。

1984年名古屋大学大学院工学研究科博士後期課程修了後、名古屋大学助手、熊本大学講師、同助教授、同教授を経て、2012年から現職。この間、カリフォルニア大学デービス校客員研究員。現在、プラスチックリサイクル化学研究会会長、国際超臨界流体学会副会長。

ごとう もとのぶ



ベトナム日本法教育研究センター設立10周年記念行事を開催

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科及び法政国際教育協力研究センターは、11月15日(水)、ハノイ法科大学において、本学とハノイ法科大学が共同で設置しているベトナム日本法教育研究センター(CJLV)の設立10周年記念行事を開催しました。CJLVは、設立以来、7期71名の修了生を輩出し、修了生は、検察庁、裁判所等の国家機関、法科大学のほか、日系



あいさつするロン司法大臣

企業などに勤務し、日本とベトナムをつなぐ架け橋として活躍しています。

10周年記念行事では、これまでのCJLVの活動を振り返るとともに、日越両国の経済関係の強化のためにCJLVが果たしうる役割について議論するシンポジウムを開催しました。シンポジウムに続き、記念式典を開催し、レ・ティエン・チャウ ハノイ法科大学学長、松尾総長のあいさつの後、本学修了生で昨年4月に司法大臣に就任したレ・タイン・ロン大臣から本学の法整備支援事業に対する謝辞が述べられ、ベトナム司法省からCJLVに在籍する8名の学生に対して奨学金が授与されました。日本からは、上川陽子法務大臣(森永太郎法務省法務総合研究所国際協力部長代読)、川端和明文部科学省国際統括官及び本記念行事に共催・助成いただいた村瀬幸雄十六銀行頭取から祝辞が述べられました。

日本大使公邸で開催された式典後の祝賀パーティーでは、梅田邦夫特命全権大使が、本学による人材育成の取り組みを高く評価されました。また、小島丈幸日越友好愛知県会議員連盟副会長からも祝辞があり、盛大な行事となりました。

尾張旭市及び株式会社デンソーと連携協力協定を締結

●情報学部、大学院情報学研究科

情報学部及び大学院情報学研究科は、10月19日(木)、尾張旭市役所において、「自治体オープンデータを活用した防災啓発アプリの開発」の研究活動を強化するため、尾張旭市及び株式会社デンソーとの三者で「ICTを活用したまちづくり及び災害対策における連携協力に関する協定」の締結式を開催しました。



村瀬研究科長、安田孝美同研究科教授をはじめ今回の連携協定に参画する関係者

これまで三者は、尾張旭市民へ避難所や災害物資などの情報をICT技術によって提供する方法を実証するため、熊本地震発生時の状況を調査して開発した防災情報アプリに関する市民参加型の勉強会を開催して意見を収集するなどの研究活動を推進してきました。この協定を締結することにより、従来の枠組みを更に発展させて、開発段階の研究成果を将来の事業へ発展させることも、協力関係を構築する目的の一つとなっています。

この連携協定に参画する三者は、地域社会の発展に寄与する「まちづくり」と「災害対策」を重点的に推進していく目的以外にも、防災関連情報の活用を促進し、「自治体の情報提供のあり方」や「利用者の増加へ向けた要因」等の分析を進めていくことで、市民が利用しやすい自治体ICTの全国的なモデルケースとなるよう、新たに検討を始めることでも合意しています。

情報学部及び大学院情報学研究科が取り組む研究が、産学公連携による「住みよいまちづくり」の好事例として、周辺自治体に波及していくことを期待しています。

テクノ・フェア名大2017を開催

●工学部、大学院工学研究科

工学部及び大学院工学研究科は、10月21日(土)、IB 電子情報館をメイン会場として、関連研究科等との共催で、「テクノ・フェア名大2017」を開催しました。

テクノ・フェア名大は、本学研究者による研究成果及び研究シーズ(種)を、ブース展示、研究室見学等を通じて発信し、産業界や地域社会と密接な交流を図ることを目的



ブース展示会場の様子

に、平成11年から実施しています。

今回は、「名古屋大学の实力」をテーマとして、特に研究成果を広く紹介することをメインに、初めて名古屋大学ホームカミングデーとの同日開催としました。また、今年は台風の影響でオープンキャンパスの工学部企画が中止となったこともあり、対象範囲を高校生にまで広げました。IB 電子情報館中棟1階廊下で実施されたブース展示には、36テーマが出展し、廊下いっぱいになったブースは見応えがありました。ホームカミングデー企画の工学部・工学研究科保護者等懇談会に参加された方をはじめ、多くの来場者に研究成果が紹介され、活発な意見交換がなされました。また、当日のブース展示のうち12のテーマについて、1テーマ5分のショートプレゼンテーションが行われ、多くの聴講者が最先端の研究成果に熱心に耳を傾けていました。さらに、今回は過去最多となる34もの研究室見学が企画され、一般の方だけでなく、高校生が親子で参加し、最新の研究成果の話の聞いたり、実験設備を間近で見たりして、研究室の雰囲気を感じていました。今回の参加者は、約500名となり、盛況のうちに閉会しました。

陸別観測施設設立20周年記念シンポジウムを開催

●宇宙地球環境研究所

宇宙地球環境研究所は、北海道陸別町及び国立研究開発法人国立環境研究所と共同で、11月8日(水)、9日(木)の両日、陸別町タウンホールにおいて「陸別観測施設設立20周年記念シンポジウム-宇宙から地球まで-」を開催しました。陸別観測施設は、1997年10月に本研究所前身の太陽地球環境研究所と国立環境研究所が陸別町立りくべつ宇宙



記念シンポジウムの様子

地球科学館2階部分に陸別観測室及び陸別成層圏観測室としてそれぞれ開設したもので、以降20年以上にわたって赤いオーロラ(低緯度オーロラ)や温室効果ガス、オゾン層破壊気体等の観測を行ってきました。また、2006年に本研究所が陸別町ポントマム地区に大型短波レーダーを設置するなど、多くの最新鋭の観測装置が設置され、国内有数の太陽地球系環境の観測拠点となっています。さらに、陸別町と観測施設に関連する国内の5研究機関による社会連携協議会が、最先端の研究をする科学者による一般向け講演会や小中学校での出前授業を継続して行うなど、地域貢献活動も積極的に行っています。

シンポジウムでは冒頭に記念セレモニーを行い、野尻秀隆陸別町長から歓迎のあいさつを受け、松下理事、上出洋介りくべつ宇宙地球科学館長、草野宇宙地球環境研究所長がそれぞれあいさつしました。陸別観測施設の関係者や観測データを利用する国内外の研究者等約30名が出席し、雪氷、オーロラ・電磁気圏、大気科学、レーダー科学に関する研究発表が行われ、陸別での観測をベースとした太陽地球系研究の議論とそれを通じた異分野の研究者間の交流を促進しました。

2017年秋季特別展「旗本高木家の明治維新」(高木家文書展)を開催

●附属図書館

附属図書館及び同研究開発室は、10月20日(金)から11月28日(火)までの間、2017年秋季特別展「旗本高木家の明治維新」(高木家文書展)を開催しました。

同館が所蔵する「高木家文書」は、美濃国石津郡時・多良両郷(現岐阜県大垣市上石津町域)を領有した旗本・西高木家の旧蔵文書群です。木曾三川流域の治水資料の宝庫として知られ、傑出した規模と内容を有する歴史資料として高い評価を受けています。この高木家文書を紹介する展示会として、昨年の「旗本高木家の幕末」に続いて、今年度は明治維新をテーマとした特別展を企画しました。

維新期の当主であった高木貞広は戊辰戦争が勃発すると新政府へ帰順する途を選び、明治3(1870)年までの大半を京都において過ごすことになります。その後を継いだ高木貞正は多芸・上石津郡長や衆議院議員・養老郡会議長などの公職を歴任し、大垣共立銀行や濃飛農工銀行の設立にかかわるなど、地域の名望家として活躍しました。特別展では、この二人の当主の活動を軸に、明治維新という政治変革のなかで高木家主従がどのように新たな時代と係わっていったのかを紹介しました。

特別展には、学生、教職員、一般の方、高木家の地元で

ある上石津地区の方など、あわせて915名の来場があり、好評を博したため会期を2週間延長しました。

また、関連企画として、大垣市上石津郷土資料館において企画展「高木家文書からみる山間地域の暮らし」が10月28日(土)から12月27日(水)にかけて開催され、両館あわせての高木家文書展となりました。

平成29年度放射性同位元素等取扱施設安全管理担当教職員研修を開催

●アイソトープ総合センター

アイソトープ総合センターは、11月9日(木)、10日(金)の両日、野依記念学術交流館及び今年8月に完成した新RI実験棟において、平成29年度放射性同位元素等取扱施設安全管理担当教職員研修を開催しました。同研修は、全国アイソトープ総合センター会議の7幹事校が順番に開催しています。今年度は本学が当番校で、原子力規制庁放射



非密封RI取扱実習の様子

線対策委託事業「安全管理技術向上のための教育プログラム開発検討会議」として開催し、国公私立大学・研究機関から44名の受講者と10名の6幹事校講師が参加しました。

初日午前中は、篠原厚大阪大学ラジオアイソトープ総合センター長による事業の趣旨説明に続いて、斉藤雅弘原子力規制庁首席放射線安全審査官による法令改正に関する講演、共催である原子力人材育成事業「原子力・放射線防災と緊急モニタリング」と科研費新学術領域「短寿命RI供給プラットフォーム」の活動に関する松田尚樹長崎大学教授と渡部浩司東北大学教授による講演、株式会社パーキンエルマージャパンの小川憲一氏による液体シンチレーション検出器の基礎に関する講演がありました。

初日午後からは、4名ずつのグループに分かれて非密封RI取扱実習と、ゲルマニウム検出器による核種定量分析の実習に取り組み、その後、新RI実験棟を見学した後、実習内容について検討しました。

最後に、竹中アイソトープ総合センター長による修了証授与の後、法令改正に伴い、より高い安全管理が求められるようになるため、このような会議は情報交換の機会としても重要であるとの訓辞がありました。

ICCAE 第2回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、11月6日（月）、リルス・A・キンセン インドネシア・ボゴール農科大学人間生態学部講師を招き、農学部第7講義室において、2017年度第2回オープンセミナー「インドネシア・ベンクル州ムコムコにおける灌漑水田地域の農業生産動向」を開催しました。



キンセン講師による講演、参加者とのディスカッションの様子

インドネシアにおいてアブラヤシ産業はこの20年間に急速に発展しました。今日では、そのプランテーションはスマトラ、カリマンタンなどジャワ以外の島々のほとんどでみられ、世界の中でも圧倒的に多い生産量を誇っています。今回話題としたスマトラ島ベンクル州のムコムコ地区もアブラヤシの生産面積が増大した地域であり、ここでは灌漑を有する水田までもがアブラヤシ園に転用されてきました。しかし、近年、灌漑水田からアブラヤシ園となった農園が、再び水田に転換されるという興味深い例が現れています。

本セミナーでは、このような農業実践の動態について、「構造化」という社会学的視点から分析した研究を解説しました。また、スマトラ島の他の州において、アブラヤシ園を伝統的な土地利用に戻そうとする動きが始まっているなどの情報も含め、学内外の参加者との情報共有を行うとともに、地域資源の持続的利用による地場産業の振興などに関して意見交換を行いました。

第35回企画展「ムシの世界」を開催

●博物館

博物館は、7月25日（火）から10月21日（土）までの間、同館展示室において「ムシの世界」を開催しました。期間中には11,365名と記録的な来場者がありました。非常に精巧な3D昆虫切り紙、世界をリードした本学の昆虫内分泌学、こだわりぬいた田淵行男の細密画、東海昆虫保存会の標本、明治時代の奈良坂源一郎の博物画、江戸から明治に生きた伊藤圭介の錦窠蟲譜など、約1,200点が展示されました。

さらにイベントとして、大場裕一中部大学准教授（7/29）、高橋 昭名誉教授（8/10）、溝口 明愛知学院大学教授

（8/23）、柳沼利信名誉教授（9/9）、大澤省三名誉教授（9/16）、山下興亜名誉教授（9/30）による昆虫に関連した講演が行われ、何れも多くの聴講者で会場があふれ、質疑応答も活発に行われました。特に、石川進一朗氏による昆虫の切り紙実演は、そのみごとな技に歓声が途切れることがありませんでした。今回の展示は、「大人も子供も楽しめ、科学好きもアート好きも満足出来る」というコンセプトで行いましたが、期待通り、多くの子供たちの来館がありました。この子供たちが2年後、5年後、10年後に博物館をまた訪れることを期待しています。



親子で楽しむ「ムシの世界」



切り紙実演に集まる多くの来館者

2017年度入館者2万人を達成

●博物館

博物館は、10月17日(火)、2017年度入館者2万人を達成しました。

2万人目の入館者は名古屋に住む家族と来館された東京都多摩市の方でした。大路館長から、遠方から足をお運びいただいたことに対する謝辞とともに、記念の証明書と記念品が贈呈されました。

続く19日(木)は、企画展「ムシの世界」が始まった7月25日(火)から数えて、入館者1万人目を達成しました。これだけの短期間で入館者が1万人を超えたのは、最短記録

となりました。1万人目は、市内緑区の方で「毎回、企画展・特別展には足を運んでいます、今回はこのようなことに遭遇してとてもうれしい」とのコメントがありました。同様に、大路館長から記念の証明書と記念品が贈呈されました。

今年度は、博物館が「駅ちかウォーキング」の会場の一つになるなど、大勢のお客様が訪れると推測され、念願の3万人の入館者が達成できると期待されます。



2017年度2万人目の入館者に記念状を渡す大路館長



企画展1万人目の入館者に記念状を渡す大路館長

第55回地球教室「博物館の収蔵庫と野外で深海の地層と化石を調べよう!」を開催

●博物館

博物館は、11月11日(土)、12日(日)の両日、第55回目となるフィールドセミナー「地球教室」を開催しました。90名を超える応募者の中から抽選で選ばれた小学3年生から一般の方34名が参加しました。

1日目は博物館において、日本や世界のさまざまな地層についてスライドを見ながら学んだ後、ガラスビーズと砂

を用いて地層をつくる実験をしました。また、博物館の収蔵庫を案内し、当館所蔵のたくさんの化石を観察しながら、化石が地層の中に残されるプロセスについて考察しました。

2日目は南知多町を訪問し、砂岩と泥岩の地層を観察した後、化石の採集を行いました。参加者は、二枚貝やヒトデ、ウニ、スナモグリ、魚の鱗などの化石を自分で見つける興奮を味わうとともに、古代の生物が地層に残された過程を考えることによって自然を身近に感じ、理解を深めていました。この事業は博物館と名古屋市科学館との連携事業の一環で、愛知大学名古屋一般教育研究室の援助を受けています。



南知多の海岸で化石採集を行う参加者の様子

あいち・なごや強靱化共創センター設立記念 防災人材交流シンポジウム「つなぎ舎」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、11月11日(土)、豊田講堂を中心に、地域の防災活動の担い手を「つなぐ」ことをテーマにしたシンポジウム「つなぎ舎」を開催しました。

本学では、愛知県などが行っている防災にかかわる人材の育成を支援しており、また、そのような目的で実施された養成講座等を受講した方々を「つなぐ」場を持つことに



シンポジウムに登壇の方々

も注力しています。今回の防災人材交流シンポジウムでは、若者をターゲットに据え、世代を超えた交流を目指した企画を実施しました。

まず、午前中は、減災館を会場に、小中高生や大学生、20代の社会人による分科会を開催し、地域の防災・減災の取り組みとして「自分たちにできること」はどのようなことかをグループで話し合いました。そして、午後は会場を豊田講堂へと移し、ディスカッションの成果を披露するとともに、阪神淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災、そして、昨年の熊本地震で被災し、その後の復旧・復興に被災地で取り組んでいる若者4名の体験談を聞く時間を持ちました。被災経験のない愛知の若者が、被災地での実体験を直接聞くことは、災害への備えや地域での活動の重要性に気づくよい機会となったようです。

なお、このシンポジウムは、愛知県、名古屋市と本学が今年6月に設立した「あいち・なごや強靱化共創センター」の設立記念行事を兼ねたもので、この新しいセンターは、産業界と協力して、この地域を災害に強くするためのシンクタンクとして活動していくことを目指しています。

カンボジア王立8大学長との懇談を実施

●アジア共創教育研究機構

アジア共創教育研究機構は、11月7日(火)、カンボジア王立プノンペン大学のチェット・チャーリー学長、王立法経大学のルイ・チャンナ学長、王立農業大学ゴー・ブントアン学長をはじめとするカンボジア王立8大学長との懇談を行いました。本学はカンボジアにおいて、カンボジア事務所、日本法教育研究センター及びアジアサテライトキャンパス



進行を行う渡辺理事

学院サテライトキャンパスを設置し、法学、国際開発、農学分野を中心に教育・研究を行っています。昨年、本学と王立プノンペン大学の共同主催により「第1回日本・カンボジア学長会議」がプノンペンにて開催されました。今回の王立8大学学長の日本訪問は、昨年につき、今後の両国における連携に係る意見交換を行うことが目的のひとつです。懇談では、渡辺理事の進行により、磯田アジアサテライトキャンパス学院長による学院紹介の後、藤川アジア共創教育研究機構副機構長から、人文社会科学研究者を中心に集結し、世界規模の課題解決に向けた共同研究を行うプラットフォームとして同機構が設立され、未来社会創造機構、高等研究院とともに、異分野融合による教育研究力強化の柱として位置づけられていることを説明しました。続いて、同機構に参画している大学院教育発達科学研究科、大学院生命農学研究科及び大学院国際開発研究科から特色ある教育・研究の紹介を行いました。カンボジア側は、研究課題「授業研究」に高い関心を示され、活発な意見交換を行いました。アジア共創教育研究機構とカンボジアの新たな連携が期待されます。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成29年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 本間道夫理学研究科教授は、細菌べん毛モーター回転子の構造を解明	10.16 (月)	日刊工業
2 患者ロボ使い 介護・医療磨く 新井史人工学研究科教授らは精巧なつくりの「人体」を試作	10.16 (月)	日経(朝刊)
3 本学発ベンチャー株式会社ティアフォーや岡谷鋼機株式会社などは、2018年春をめどに、自動運転車を用いた近距離移動サービスの実証実験を愛知県内の公道や商業施設内で始める	10.16 (月)	日刊工業
4 第30期竜王戦七番勝負 20日開幕 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生が2回戦で敗れ、プロ初黒星を喫した	10.16 (月)	読売
5 藤井聡太を生んだもの(10):ふみもと教室④ もう一人の指導者 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生	10.16 (月)	中日(夕刊) 他21回
6 江戸を読む この豊かなる古書世界 塩村 耕人文学研究科教授①:古書大国、日本 データ化で「宝物」共有	10.17 (火)	中日(朝刊)
7 秋季医療講演会開催:11月18日 祖父江 元医学系研究科特任教授が講演	10.17 (火)	中日(朝刊)
8 第70回全日本合唱コンクール全国大会:大学ユース 混声合唱団名古屋大学コール・グランツェが登場	10.17 (火)	朝日(朝刊)
9 ジェンダー・リサーチ・ライブラリーが11月1日にオープンする	10.17 (火)	毎日(夕刊)
10 紙つぶて:有人宇宙学 大同大学学長神保睦子本学博士課程修了	10.17 (火)	中日(夕刊) 他4回
11 本学や東京大学、広島大学など日本の重力波追跡観測チームは、本学が所有する望遠鏡を使い、「重力波」の源となる天体からの光をとらえることに成功した	10.17 (火) 10.18 (水)	日刊工業 中日(朝刊) 中日(朝刊) 日刊工業
12 ナショナルコンポジットセンターは炭素繊維強化プラスチックを使った自動車用シャシーの製作に世界で初めて成功し石川隆司同特任教授は「世界のトップに出たと思っている」と語る	10.17 (火) 10.20 (金)	朝日(朝刊) 他2社 日刊工業
13 地球教室「博物館の収蔵庫と野外で深海の地層と化石を調べよう!」開催:11月11、12日 初日は博物館収蔵庫、2日目は知多半島に出かけて学ぶ	10.17 (火) 10.22 (日)	中日(朝刊) 中日(朝刊)
14 第3回学生住宅デザインコンテスト:Reversible Lumber Wall -積層間伐材を用いた別荘計画 大塚洋人さん本学大学院生、安藤祐太さん同大学院生、前田理沙さん同学生、板橋佳祐さん同学生、森田麻友さん同学生	10.18 (水)	中日(朝刊)
15 アグリビジネス創出フェア開催:11月7、8日 野依記念学術交流館で行われる	10.18 (水)	中日(朝刊)
16 あいち・なごや強靱化共創センターに資金を提供する企業の第1号があいおいニッセイ同和損保株式会社に決まった	10.18 (水)	中日(朝刊)
17 三菱電機杯毎日甲子園ボウル 本学アメリカンフットボール部が全日本大学選手権への出場権を獲得	10.18 (水)	毎日(朝刊)
18 この人:「水俣学」をリードする熊本学園大学研究センター長花田昌宣氏本学卒業生	10.18 (水)	中日(朝刊)
19 科学の森:将棋の「天才」の育て方 長期の訓練で「直観」成長 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生	10.19 (木)	毎日(朝刊)
20 第70回新聞週間「新聞週間記念の集い」開催:28日 講談・トークショー「将棋の魅力〜藤井聡太物語」が行われ、杉本七段は藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生について「悔しいという気持ちが大切。それが無ければ強くなれはしなかった」と語る	10.19 (木)	毎日(朝刊) 他2社
21 私の1票⑤:税の使途 本格議論を MURC 副主任研究員杉本宗之氏本学工学修士	10.19 (木)	毎日(朝刊)
22 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生の師匠・杉本七段の講演会が11月5日大阪市の中之島フェスティバルタワー18階で開かれる	10.19 (木)	朝日(夕刊) 読売
23 馬場嘉信工学研究科教授らは、世界最高感度の電気計測システムを開発	10.20 (金)	日刊工業
24 減災館の来館者が19日、5万人に達し、記念式典を開いた	10.20 (金) 10.24 (火)	中日(朝刊) 読売
25 講演会 日本トゥレット協会「教育シンポジウム」2017開催:29日 岡田 俊医学部附属病院准教授が基調講演	10.20 (金)	毎日(朝刊)
26 博物館講座「大学博物館が語る、地球と人類のヒストリー」開催:11月4日	10.20 (金)	中日(朝刊)
27 第59期王位戦予選トーナメント2回戦:藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生が勝利	10.20 (金)	中日(朝刊)
28 時のおもりに「岩盤規制」と「共有地の悲劇」生活守る規制 国の責務 池内 了本学名誉教授	10.21 (土)	中日(朝刊)
29 「あいち自動運転推進コンソーシアム」第1回総会開催:20日 本学で行われた	10.21 (土) 10.23 (月)	日経(朝刊) 他2社 日刊工業
30 太陽フレア 地球脅かす 増田公明宇宙地球環境研究所准教授らが樹齢1900年の屋久杉の年輪にある特殊な炭素を調べた研究で、奈良時代の775年に宇宙から大量の放射線が降り注いだことがわかっている	10.22 (日)	日経(朝刊)
31 モヤモヤ経済学:ジャーナリスト西岡幸一氏 ノーベル賞礼賛は夕日の賛美 赤崎 勇本学特別教授、天野 浩未来材料・システム研究所教授の青色LEDの研究が1980年代から90年代初頭のものを取り上げられる	10.22 (日)	日経(朝刊)
32 地震について親子で学ぶ体験イベントが21日に減災館であり、福和伸夫減災連携研究センター教授を講師に県内と岐阜県からの参加者が地震に強い建物の造りなどを学んだ	10.22 (日)	中日(朝刊)
33 白木之浩医学系研究科助教らは、神経膠腫について、たんぱく質「CD109」を発現する血管周囲の腫瘍細胞が腫瘍の悪性化に関与することを突き止めた	10.23 (月)	日刊工業

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成29年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
34 化学系団体トップメッセージ：科学技術インフラ・ストラクチャー創造 日本化学会会長山本 尚本学名誉教授	10.23 (月)	日刊工業
35 中日文化センター講座 文学：ヴィクトル・ユゴー「レ・ミゼラブル」の魅力の秘密に迫る 加藤靖恵人文学研究科准教授	10.23 (月)	中日 (夕刊)
36 29歳中村新王座誕生 羽生棋聖一冠に 若手台頭 大乱迎える 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生の活躍について取り上げられる	10.23 (月)	日経 (夕刊)
37 本学と株式会社デンソー、尾張旭市は、ICTを活用したまちづくりと災害対策の事業を進めるため、連携協定を締結した	10.24 (火)	中部経済
38 江戸を読む この豊かなる古書世界 塩村 耕人文学研究科教授②：謎めいた写本をひもとく 人は走らなかった！	10.24 (火)	中日 (朝刊)
39 パーキンソン病医療講演会開催：11月26日 平山正昭医学系研究科准教授が講演	10.24 (火)	中日 (朝刊)
40 公益財団法人中部科学技術センター2017年度学術奨励研究助成事業助成先：田中晴祥医学部附属病院医員	10.24 (火)	中日 (朝刊)
41 名大アメリカンフットボール部 全日本大学選手権初出場 躍進 女性スタッフ支え 東海学生リーグで4年ぶり7回目の優勝を果たしスタッフリーダーの安藤真帆さん本学4年生は、女性スタッフが多い理由について「サポートではなく、戦力として活躍できるから」と語り、福永真由香さん同4年生は「選手の力を底上げする土台になっている」と語る	10.24 (火)	毎日 (夕刊)
42 あいち・なごや強靱化共創センターに資金を提供する企業の第1号があいおいニッセイ同和損保株式会社に決まり、寄付金100万円贈呈した	10.26 (木)	中日 (朝刊) 中部経済
43 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生が同附属高等学校に進学すると発表	10.26 (木)	中日 (朝刊) 他4社
44 足立 守本学名誉教授が名古屋経済大学「犬山学研究センター」の開設を記念したシンポジウムで講演した	10.26 (木)	読売
45 みんなの本：書籍「なごや飲食夜話千秋楽」安田文吉本学卒業生著、書籍「お母さんの『敏感期』」藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生も受けたモンテッソーリ教育の第一人者相良敦子氏著	10.26 (木)	中日 (朝刊)
46 名古屋大学出前授業 in 豊橋2017「宇宙線で挑むピラミッドの謎」開催：11月5日 森島邦博高等研究院特任助教が教壇に立つ	10.27 (金)	毎日 (朝刊)
47 オープンカレッジ：産業間ネットワークを探る 地域にイノベーションを導くために 名古屋市立大学講師山田恵里氏本学博士課程修了生	10.27 (金)	中部経済
48 読んでナルホド：美を見いだした者たち 書籍「中学生棋士」谷川浩司著、書籍「天才棋士降臨・藤井聡太」藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生が取り上げられている	10.28 (土)	中部経済
49 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生が安倍晋三首相が教育無償化・負担軽減などの財源について「産業界においても3000億円程度の拠出をお願いしたい」と求めたことについて「従業員が活用できるなら応分の協力はすべきだ」と語る	10.28 (土)	日経 (朝刊) 読売
50 暗黒物質の初観測を目指す日本のプロジェクトが来年末で終了し、今後本学や東京大学などがチームを結成し、イタリア中部の地下で再来年から行われる実験に参加する	10.29 (日)	読売
51 社説：重力波観測「かぐら」の活躍を早く見たい 本学や東京大学、国立天文台が参加した重力波観測の追跡観測が取り上げられる	10.30 (月)	読売
52 伊丹健一郎トランスフォーマティブ生命分子研究所教授が愛知県立半田高等学校で講演会を行った	10.30 (月)	中日 (朝刊)
53 防災人材交流シンポジウム・つなぎ舎開催：11月11日 あいち・なごや強靱化共創センター設立記念	10.30 (月) 11. 6 (月) 11. 9 (木)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
54 学業と将棋 悩ましい選択 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生は高校進学へ	10.30 (月)	朝日 (朝刊)
55 第30期竜王戦七番勝負第4局が開催されるのに合わせて、読売新聞中部支社が大盤解説会を開き、藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生の師匠杉本昌隆七段が解説	10.30 (月)	読売
56 名古屋で起業 応援投資 人工知能を使ったシステム開発の株式会社キスモ社長三野稜太さん本学4年生はベンチャー応援組織「ミッドランド・インキュベーターズ」について「ビジネスプランの立て方や取引先との交渉術など経営のほとんどに関わってもらっている」と語る	10.30 (月)	中日 (夕刊)
57 坪木和久宇宙地球環境研究所教授らは飛行機で近づき台風21号の目に観測機器「ドロップゾンデ」を投下し観測を行ったことについて「大規模避難を考える場合は正確で効果的な予測が不可欠で、直接観測を重ね精度を高める必要がある」と語る	10.31 (火)	毎日 (朝刊) 日経 (朝刊)
58 移植はいま 法施行20年：現場啓発 再び先進県へ 本学など医学部がある愛知県内の4大学の学長や総合病院の院長でつくるNPO法人「あいち臓器提供支援プログラム」が設立された	10.31 (火)	中日 (朝刊)
59 ブラック部活 改革を 内田 良教育発達科学研究科准教授は「平日の部活動はサービス残業で土日の手当も最低賃金に届くかどうか。まさに『ブラックです』」と語る	10.31 (火)	毎日 (朝刊)
60 人情 交差点：第21話 名大相撲部 ①主将 まわし染める土と汗 相撲部主将館 陽太さん本学4年生は相撲について「一瞬で勝負がつくから面白い」と語る	10.31 (火)	中日 (朝刊)
61 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生を招待し、名古屋城こども王位戦が来年2月から3月までの日程で初めて開催されることが決まった	10.31 (火)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成29年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
62 トヨタ自動車グループの創始者豊田佐吉翁の命日にあたる30日、静岡県湖西市の新居地域センターと豊田佐吉記念館で顕彰祭が開催され、豊田章一郎全学同窓会会長は「急速な技術革新で日本の産業競争力は厳しさを増している」と語る	10.31 (火)	日刊工業 毎日 (朝刊)
63 五島剛太理学研究科教授は、植物の発生や形態形成に重要な役割を果たす細胞内の高分子化合物の構造を突き止めた	11. 1 (水)	日刊工業
64 地域防災力充実強化大会 in 愛知2017開催：10月24日 福和伸夫減災連携研究センター教授が講演し「行政の支援に頼り切っているはだめ。地域全体で守る意識付けをしてほしい」と語る	11. 1 (水)	中日 (朝刊)
65 人情 交差点：第21話 名大相撲部 ②マネージャー 寛容さ 大家族みたい 本学相撲部マネージャー石津裕梨さん 同1年生は相撲部について「なくてはならない生活の一部」と語る	11. 1 (水)	中日 (朝刊)
66 理系白書特別対談 ノーベル賞受賞者から次世代へ 求められる「創造性」 芝浦工業大学学長村上雅人氏本学元客員教授ら	11. 1 (水)	毎日 (朝刊)
67 ジェンダー・リサーチ・ライブラリ開館記念式典開催：10月31日 松尾総長は「日本のジェンダー研究の新しい境地を切り開くことを期待する」と語る	11. 1 (水) 11. 2 (木) 11. 7 (火)	読売 朝日 (朝刊) 毎日 (朝刊) 中日 (朝刊)
68 本学やトヨタ自動車株式会社、愛知県、春日井市など産学官が連携し「高蔵寺ニュータウン先導的モビリティ検討会議」が発足した	11. 2 (木)	毎日 (朝刊)
69 平成29年秋の褒章 紫綬褒章：貝淵弘三医学系研究科教授	11. 2 (木)	中日 (朝刊) 他4社
70 人情 交差点：第21話 名大相撲部 ③師範 理論派 ダンディズム 細谷辰之氏本学元教授が2000年に約60年ぶりに同相撲部を復活させた	11. 2 (木)	中日 (朝刊)
71 後藤寛貴生命農学研究科特任助教らのグループは、なぜカブトムシの角は蛹で突然出現できるのかを解明した	11. 2 (木) 11. 3 (金)	毎日 (夕刊) 朝日 (朝刊)
72 森島邦博高等研究院特任助教らのグループは、宇宙線を利用した最新の透視技術によりエジプト・クフ王のピラミッド内部に巨大な空間を発見し、河江肖利本学共同研究員は「4500年にわたり誰も知らなかった空間を見つけた世紀の大発見だ」と語る	11. 3 (金)	日経 (朝刊) 他6社
73 瑞宝中綬章：郷理事、三田一郎本学名誉教授、杉浦康夫本学名誉教授	11. 3 (金)	中日 (朝刊) 他4社
74 本学の研究者も検証のため同行し、西尾市でスマートフォン向けに開発が進む避難訓練支援アプリケーション「逃げトレ」を使った訓練を行う	11. 3 (金)	毎日 (朝刊)
75 わたしの気持ち：学祭の思い出 広瀬美咲さん本学学生	11. 3 (金)	毎日 (朝刊)
76 編集日誌：森島邦博高等研究院特任助教の宇宙線を利用したクフ王のピラミッド内部にせまる研究成果が取り上げられる	11. 3 (金)	中日 (朝刊)
77 第76期将棋名人戦・C級2組順位戦6回戦：藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生が勝利	11. 3 (金)	朝日 (朝刊)
78 「第14回高校化学グランドコンテスト」最終選考会開催：10月28、29日 巽 和行物質科学国際研究センター特任教授は「発表内容はどれも素晴らしく、僅差のため審査はととても難しかった」と語る	11. 4 (土)	読売
79 マナビバ：卒業生ら招待 ホームカミングデー 広がれアイラブ母校の輪 本学のホームカミングデーが取り上げられる	11. 5 (日)	中日 (朝刊)
80 「ブラック部活」にNO 声上げ始めた先生たち 内田 良教育発達科学研究科准教授は問題の背景に「全員顧問制度」があると語る	11. 5 (日)	毎日 (朝刊)
81 病院の実力：めまい 本学の治療実績が取り上げられる	11. 5 (日)	読売
82 人情 交差点：第21話 名大相撲部 ④大須の大会世話役 雑多な街 失敗に学べ	11. 5 (日)	中日 (朝刊)
83 福和伸夫減災連携研究センター教授は、南海トラフ地震に関連する情報の運用を始めたことについて「ガイドラインの早期策定が急務だ」と語る	11. 6 (月)	中日 (朝刊)
84 第49回全日本大学駅伝：5日 駆け抜ける 陸上も研究も「両立できる」思い込めて力走 東海学連選抜 国司寛人さん工学研究科2年生	11. 6 (月)	朝日 (朝刊)
85 ラサールさんのなごや日記(1)：USJ 至る所に外国人 在名古屋カナダ領事シェニエ・ラサール氏本学修士号取得	11. 6 (月)	中日 (朝刊)
86 本学など5大学は、東洋大学を中心に技術向上を目的とした、組み込みシステムやクラウドコンピューティングなどの再教育プログラムを2018年度に開設する	11. 7 (火)	日刊工業
87 SIA 年末経済講演会開催：11日 小堀 聡経済学研究科准教授が講演	11. 7 (火)	中部経済
88 東海自然学園祭「自然を学び、自然を楽しもう！」開催：16日 吉田英一博物館教授が「球状コンクリーションとは？」をテーマに講演	11. 7 (火)	中日 (朝刊)
89 人情 交差点：第21話 名大相撲部 ⑤定食店「ひさや」学生の胃袋支え40年	11. 7 (火)	中日 (朝刊)
90 医人伝：満足いく生涯を手助け 丹生川診療所所長土川権三郎氏本学卒業生	11. 7 (火)	中日 (朝刊)
91 加藤一晃さん本学大学院生は、部活動の時間が長すぎると、生徒の学習習慣にも影響するとの分析結果を発表	11. 7 (火)	毎日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成29年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
92 第36回博物館企画展計る 測る 量るー明治～平成のアナログ計測・観測・計測機器開催：7日～1月20日	11. 7 (火)	朝日 (夕刊)
93 熱可塑性 CFRP 実用化促進 ナショナルコンポジットセンターは、熱可塑性炭素繊維強化プラスチックの成形技術の実用化を促進する	11. 8 (水)	日刊工業
94 アグリビジネス創出フェア開催：7、8日 野依記念学術交流館で始まり、本学農学部生によるベンチャー企業が手掛けた規格外野菜のスープやピューレなどが並んだ	11. 8 (水)	中日 (朝刊)
95 あいちの文化 学生レポート 報告・公演会開催：12月17日 本学の学生も参加	11. 8 (水)	中日 (朝刊)
96 叙位叙勲：正四位瑞宝中綬章 故鳥脇純一郎本学名誉教授	11. 8 (水)	中日 (朝刊) 読売
97 第60次南極地域観測隊の副隊長に海洋研究開発機構・地球環境観測研究開発センター長代理原田尚美氏本学博士号取得が決まった	11. 8 (水)	毎日 (朝刊)
98 本学を参考に愛知大学の学生サークル「国際協力団体 SEED」が同大学の学生食堂で社会貢献運動「TABLE FOR TWO」に取り組んだ	11. 8 (水)	中日 (朝刊)
99 毎日農業記録賞 優良賞：中川直之さん本学大学院生	11. 9 (木)	毎日 (朝刊)
100 囲碁棋士六浦雄太七段が藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生に刺激を受けていると語る	11. 9 (木)	中日 (朝刊)
101 財界賞：日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生	11. 9 (木)	毎日 (朝刊)
102 クイーンズ駅伝 in 宮城 第37回全日本実業団対抗女子駅伝競走大会：26日 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生がエントリー	11. 9 (木)	毎日 (朝刊)
103 東海・大学人交流集会「現在の改憲動向と大学人の課題」開催：22日 アジア法交流館で行われ、愛敬浩二法学研究科教授が講演	11.10 (金)	中日 (朝刊)
104 2017ユーキャン新語・流行歌大賞：ノミネート「藤井フィーバー」藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生	11.10 (金)	朝日 (朝刊) 読売
105 東山哲也トランスフォーマティブ生命分子研究所教授らのグループは花粉管へ誘引する際の鍵と鍵穴を解明	11.11 (土)	中日 (朝刊)
106 地元ジビエを味見 浜村葉月さん生命農学研究科1年生は「カラスは臭みがなく、鶏肉のようでおいしかった。一般人がジビエ料理を知る機会がさらに増えれば」と語る	11.11 (土)	読売
107 仁科記念財団 (理事長小林 誠本学特別教授) 仁科記念賞：九州大学最先端有機光エレクトロニクス研究センター長安達千波矢氏ら	11.11 (土)	読売
108 防災人材交流シンポジウム・つなぎ舎開催：11日 あいち・なごや強靱化共創センター設立記念が豊田講堂で行われた	11.12 (日)	中日 (朝刊)
109 メッセナゴヤ2017開催：8～11日 メッセラボを企画した宇治原 徹未来材料・システム研究所教授は「さまざまなアイデアも、実現できるのは一握りの人たち。発表会で試されているのは、良さに気づく大人だ。素晴らしさを見出してほしい」と語る	11.14 (火)	中部経済
110 アットマーク大学：職員 進む専門化、高度化 本学も高度な大学運営能力を有する幹部職員を養成する大学院を設けている	11.14 (火)	毎日 (朝刊)
111 香川愛生の駒音だより「ひふみん」だなんて… 2017年の新語・流行語大賞候補が発表され、「藤井フィーバー」と共に「ひふみん」がノミネートされたことについて 藤井聡太さん教育学部附属中学校3年生	11.14 (火)	朝日 (朝刊)
112 合同訪中団結団式開催：13日 日本経済団体連合会会長榊原定征氏本学卒業生が日中韓の自由貿易協定や東アジア地域包括的経済連携の早期締結を訴えた	11.14 (火)	毎日 (朝刊)
113 佐々木重洋人文学研究科教授の研究室で学ぶ吉村有希さん大学院1年生が花祭りで花形の「四ツ舞 剣」を披露する大役を務め上げた	11.14 (火)	中日 (朝刊)
114 2008年にノーベル化学賞を受賞した下村 脩本学特別教授が発見したオワンクラゲの緑色蛍光たんぱく質を使い、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構が開発した蛍光シルクを作る遺伝子組み換え蚕の大量飼育に、前橋市の養蚕農家が世界で初めて成功した	11.15 (水)	毎日 (朝刊)
115 本学は2018年度入学募集要項を発表し、募集人員は本年度と同じ9学部2700人	11.15 (水)	中日 (朝刊)
116 本学で名古屋国税局長垣水純一氏が講演を行った	11.15 (水)	読売 中日 (朝刊)
117 三菱電機杯毎日甲子園ボウル：19日 本学対西南学院大学	11.15 (水)	毎日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月19日(火)

場 所：豊田講堂
時 間：18:30～
対 象：幼児以上、一般
参 加 費：無料

Campus Concert

演奏曲目：「間奏曲（フルートソロ）」（ジャック・イベール）、
「コンクールのための独奏曲第1番（オーボエソロ）」
（シャルル・コラン）、
「コンクールのための独奏曲（クラリネットソロ）」
（アンドレ・メサジェ）、
「デンマークとロシアの歌によるカプリス 作品79
（四重奏）」（カミーユ・サン＝サーンス）、ほか
出 演：松原雅美氏（フルート）、小室真美氏（オーボエ）、
小田美沙紀氏（クラリネット）、近藤杏美氏（ピアノ）



[問い合わせ先]

Development Office (DO室) 052-747-6558

12月22日(金)

場 所：ナショナルイノベーション
コンプレックス 1階 Idea Stoa
時 間：16:00～19:30
定 員：70名
対 象：東海地域の大学および大阪大学の
学生、ポストドクター
(聴講はどなたでも可)

アイデアピッチコンテスト

内 容：起業をはじめ、企業とタイアップした新事業、社会貢献、学生
イベントを盛り上げるためのアイデアなどのコンテストを実施し、優秀なアイデアは Tongali プロジェクトが起業に向けて
サポートする



[問い合わせ先]

学術研究・産学官連携推進本部
Tongali プロジェクト事務局 052-747-6490

12月25日(月)

場 所：ES 総合館、ナショナルイノベ
ーションコンプレックス
時 間：10:30～16:00
定 員：200名
対 象：青年の支援に関心のある方
参 加 費：無料

名古屋大学地域貢献事業

**「苦戦する青年を育てる地域づくり-大学を
プラットフォームとして産官学地域をつなぐ-」**

テ ー マ：「苦戦する青年の現状と大学における支援実践」
(公開シンポジウム)、
「苦戦する青年を育てる産官学地域のあり方」(分科会)
内 容：公開シンポジウム、分科会、個別相談会



[問い合わせ先]

学生相談総合センター 052-789-5805

12月26日(火)

場 所：理学南館 1階坂田・平田ホール
時 間：13:30～17:30
定 員：100名
対 象：関心のある中学生以上の女性や
保護者
参 加 費：無料

テクノ シンポジウム 名大

「機械航空女子シンポジウム」

テ ー マ：「イキイキ・キラキラ カッコイイよね機航女子☆
聞いてみよう！ホントのトコロ」
講演題目：「女性と工学が拓く未来」
講 演 者：辻 篤子 (国際機構特任教授)
講演題目：「多分わたしだから作った『針なし気泡注射器』、
あなたなら何を作る？」
講 演 者：山西陽子氏 (九州大学教授)
講演題目：「科学者の自在性」
講 演 者：上出寛子 (未来社会創造機構特任准教授)
講演題目：「モノづくりの魅力！自動車設計の仕事とは」
講 演 者：山田 悠氏 (トヨタ自動車株式会社)
講演題目：「エアラインエンジニアってどんな仕事？」
講 演 者：安田知加氏 (株式会社 JAL エンジニアリング)
内 容：講演、カフェタイム、見学会



[問い合わせ先]

工学研究科
助教 宮田喜久子 wmae2017@gmail.com

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月19日(金)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：13:00～18:30
対 象：学生、一般
参 加 費：無料（意見交換会は2,000円）

第7回シンクロトロン光研究センターシンポジウム

内 容：研究成果や光源加速器・ビームライン開発に関するトピックを紹介し、放射光を利用した新たな研究の可能性や有効性について議論する

[問い合わせ先]
シンクロトロン光研究センター
052-747-6562

1月20日(土)、21日(日)

場 所：ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
時 間：10:00～17:00 (1/20)、
9:00～17:00 (1/21)
対 象：一般
参 加 費：無料

人文学研究科附属「アジアの中の日本文化」 研究センター国際シンポジウム 「1930年前後の文化生産とジェンダー」

[問い合わせ先]
人文学研究科附属
「アジアの中の日本文化」研究センター
教授 飯田祐子 y-iida@lit.nagoya-u.ac.jp



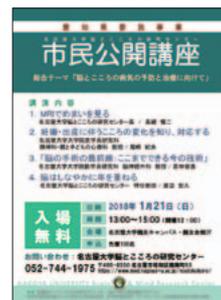
1月21日(日)

場 所：医学部附属病院鶴友会館2階
大会議室
時 間：13:00～15:00
定 員：100名
対 象：一般
参 加 費：無料

脳とこころの研究センター市民公開講座 「脳とこころの病気の予防と治療に向けて」

講演題目：「MRI でめまいを見る」
講 演 者：長縄慎二（医学系研究科教授／脳とこころの研究センター長）
講演題目：「妊娠・出産に伴うこころの変化を知り、対応する」
講 演 者：尾崎紀夫（医学系研究科教授）
講演題目：「脳の手術の最前線：ここまでできる今の技術」
講 演 者：若林俊彦（医学系研究科教授）
講演題目：「脳はしなやかに年を重ねる」
講 演 者：渡邊宏久（脳とこころの研究センター特任教授）

[問い合わせ先]
脳とこころの研究センター事務局
052-744-1975



2月6日(火)～5月12日(土)

場 所：博物館2階展示室
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日
入 場 料：無料

第37回博物館企画展「春を迎える 年画に込められた願いと意図」、 博物館スポット展「ボタニカルアート作品展」

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

名大トピックス No.295 平成29年12月15日発行
編集・発行／名古屋大学総務部総務課広報室
本誌に関するご意見、ご要望、受賞の掲載、記事の掲載などは広報室にお寄せください。
名古屋市千種区不老町（〒464-8601）
TEL 052-789-2699 FAX 052-789-2019 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/publication/index.html>）でもご覧いただけます。

表紙
ジェンダー・リサーチ・ライブラリを利用する留学生ら
（平成29年9月26日）



188 新制大学への道 — 2019年のもう1つの周年 —

名大は今年9月、創立80周年などの記念事業として、「プロジェクト NU MIRAI」構想を発表しました。2019(平成31)年が創立80周年にあたるわけですが、実は、この年にはもう1つの周年があります。それは新制大学移行70周年です。他の多くの大学も同じのため目立ちませんが、大学の制度的なあり方から見れば、1949(昭和24)年の旧制大学から新制大学への転換は、2004年の法人化と並ぶ、名大史上の最も大きな画期といえます。

敗戦による連合軍の進駐から1949(昭和24)年5月31日の新制大学の設置までの約3年9か月は、旧制の高等教育機関がGHQや政府の動向に翻弄されながら紆余曲折した時代で、帝国大学も例外ではありませんでした。さらに、戦時下に創立された名大は、当時、医・理・工の三学部しかなく、新学部をいくつも設置して真の総合大学になるという困難をも抱えていたのです。

文文学部の設置にあたっては、愛知県内にあった第八高

等学校・名古屋経済専門学校・岡崎高等師範学校を包括することが期待されました。しかし、名経専は商科大学、岡崎高師は教育大学への昇格を目指す有力な動きがあり、名大への包括は容易ではありませんでした。実現はしませんでした。三重県の神宮皇學館大学の包括や、豊橋市の愛知大学の名大への合流をめざす運動や構想もありました。結局、最終的には八高・名経専・岡崎高師は名大に包括されることになり、1948年9月に文学部と法経学部が、新制移行と同時に教育学部が設置されました。

理系学部でも、農学部の設置に大きな困難を伴いました。名大は、岐阜農林専門学校(現岐阜大学応用生物科学部)を包括して農学部とする構想を推進しましたが、GHQと政府が全ての都道府県に国立大学を設置する方針等を打ち出したため、断念せざるを得なくなりました。

こうして新制名古屋大学は、心ならずも文・教育・法経・理・工・医の6学部で出発することになったのです。



1	2	3
4	5	

- 1 文文学部を法文学部のみとする案を名経専が拒否したことを報じる『名古屋経専新聞』(1948年4月30日付)。法経学部経済学科・経営学科(1950年4月から経済学部)の教官の多くは、名経専から移籍した。
- 2 名城キャンパス(現愛知県体育館)にあった文学部3号館(野外博物館明治村)。文学部と法経学部は、合わせて一学部分の予算で設置されたため、特に法経学部法律学科・政治学科(1950年4月から法学部)は教官の確保がままならず、設置時は専任教官がいなかった。
- 3 農学部があった安城キャンパス(現安城市総合運動公園)。農学部は、地域からの寄附と安城町(現安城市)の誘致により、1951年4月に設置された。当時の農学部には、本格的な農場が近くにあることが必要だった。
- 4 名古屋帝国大学工学部の東山校舎。戦時下においては鉄筋の建物を造ることができず、突貫工事の木造校舎ばかりであった。戦後の名大は、甚大であった空襲被害からの復興だけではなく、こうした創設期の施設の問題も抱えていた。
- 5 瑞穂分校(教養部、現名市大滝子キャンパス)から出て来る名大生たち。教養部の教官の多くは、八高と岡崎高師から移籍した。

